

## 第四節 民間信仰

すべての現象―病気・災害・凶作等―を神の意志の具現と感得したのは、人類の歴史の中に生き続けてきた民衆の心なのかも知れない。だからこそ、毎日毎日の生活の中に、いつも神の姿を拝し、神の前に平伏する気持で生きてきたものであろう。人間の生活に個人と社会人の二面があつたとしても、神を懼れ、神に頼る心に二面はなかつた。

長い人間の歴史の中で、人間の生活形態は大巾に変化を遂げたが、一旦心の中に立ち入ってみれば、時の流れがそれ程経過していないことに、むしろ驚ろかされる。大都会のビルの屋上の小祠は、端的にそれを物語っている。

こうして人々が各自の心の中で信じ頼る神は、種々の場所で、様々な姿で人々と接してきた。人間と神の交渉の場を探ることは、そのまま人々の心を探ることになる。そうした観点に立つて、以下当地方の民間信仰の実態を眺めてみよう。

### 1 講 組 織

講とは信仰を同じくする人たちの集団で、一定の日に集まり信仰行事を行うものである。信仰の対象となるものにより、第1表のような講があつた。

第1表 白 鷹 町 の 講

講の名称	講の目的	関連する碑、像
庚申講	庚申の夜集まって無病息災を祈念する	庚申塔 青面金剛像
念仏講	念仏を唱えて仏を供養する	南無阿彌陀佛 百万遍
観音講	月の十七日に集まって観音さまに祈念する	南無観世音菩薩 三十三観音
地藏講	月の二四日に集まって地藏さまに祈念する	地藏供養塔 六面幢
巳待講	己巳の日の巳の刻に集まって弁才天に祈念する	巳待塔 弁才天
子待講	甲子や十一月の子の日に寄合って大黒天を祀る	子持塔 大黒天
文殊講	子どもたちに文殊さまを信仰させる	文殊塔
伊勢講	伊勢神宮を信仰するもので代参講である	太神宮 伊勢代参供養塔
八日講	湯殿山信仰の講	湯殿山 八日塔
大宮講	小国の大宮神社を信仰し、子育安産を祈願する	大宮塔 大宮子易大明神
古峯原講	栃木県古峯神社信仰の代参講	古峯神社
金華山講	金華山詣りのための講	金華山 黄金山

この他、虚空蔵講・市神講・山の神講などもあり、それぞれ関連碑が立てられている。【第五章第四節 第8項参照】

数の上で断然多いのが、庚申講関係の庚申塔・青面金剛像である。この二つのうち像は僅少で、殆ど碑である。各地区に、平均してあり、以前から相当盛んに講がもたれていたものである。百体庚申塔が五ヶ所もあり（西田尻上の台、鮎貝赤坂、深山二ヶ所、荒砥愛宕山）、他の地方と大きく異なる。

庚申塔に次いで多いのが湯殿山信仰関係で、特に鮎貝に多いのは三山詣りの経路などから考えてもうなずける。ついで、太神宮、念仏碑、大宮塔などとなっているが、民衆の信仰の度合いを示すものとして興味深い。

では、それらの講が具体的にどんなことを行っていたのか、その実状について各講毎に代表的なものを取り上げて眺めてみることにしよう。

(1) 庚申講

庚申講には仏教系のもものと神道系のもとのがあるもので、それぞれ一例ずつ取り上げる。

萩野地区庚申講は、講中一三戸、以前は庚申の日毎に集まってい

たが、現在は初庚申のみ集まる。初庚申の日は午後一時頃まで宿に集まり、青面金剛の掛図を掛けて拝みあげをする。祭壇には、豆・だんご・お菓子・御神酒を供え、一同で「オーコーシンレコーシンレ、マイタリマイタリ、ソワカ」と一〇八回唱える。唱言の数は、一文銭を用いて確かめるようにしている。拝みあげが終わると、精進なので、豆腐汁などを作ってもらって食べながら雑談して帰る。この日の供物を食べると、風邪をひかないといっている。当日の経費は、頭割負担である。お産、葬式のあった家の人は休むことになっている。宿は順送りで、宿を送ることを「トワタシ」という。

中山地区中田庚申講は、講中九戸、現在は初庚申のみ、午前十時頃まで集まり、猿田彦大神の掛図と青面金剛像を本尊としてまつり、御神酒・だんごを供え、口を漱いで拝みあげをする。拝みあげの唱言は「カケマクモ カシコキサルダヒコノオオカミノミマエヲ オロガミマツル」で、これを百回繰り返す。終えてから御神酒をいただき、楽しく雑談をして帰る。料理は精進でなく、魚も食べる。庚申さまは金神だと言われている。

庚申講の数は多く、萩野・中山地区の他、滝野・十王・荒砥新町・貝生・黒鴨・高岡・山口など、現在も各地に残っている。

初庚申の日に、左・ないした縄を二回棟木に巻きつけ、「男結び」をかけておくと火伏せになるといい、また「庚申」と紙に書いたものを、上下逆さにして入口の戸の腰板に貼っておくと、盗人除けになると言われている。

## (2) 高玉念仏講

念仏講については、滝野村念仏講の例を、第五章第四節第8項で述べたが、ここでは高玉念仏講をとりあげる。講中一六〇戸（農家一三〇戸、非農家三〇戸）、戸主が参加する。春の彼岸の中日の午後一時頃まで全員集まり、十三仏の掛図をかけ、「南無阿弥陀仏」と千回唱える。前年の講の日からその日までの間に新しい仏が出た家では、

ろうそくを供えて拜む。御本尊には団子を供え、念仏が終えると参会者に配る。その後、一同でおでんなどを作って酒を少しのんで解散する。

講の起源は明らかではないが、昭和三十九年までは、区民総会を兼ねており、四十年から別にした。講中が葬具一式、食器などを所有している。

### (3) 山口姫城大宮講

講中三二人。いずれも農家の若い嫁である。講は、三月・八月・九月の各十九日に開く。以前は宿は順送りであったが、現在は姫城公民館で開く。本尊として大宮大明神の掛図をかけ、お神酒・お菓子を供えて礼拝する。「キワメテキタナキコトモタマリナケレバケガレニハアラズウシトノタマガキキヨミキヨミズ 大宮大明神 大宮大明神」と唱言を述べる。終えると茶菓で歓談して帰る。秋は赤飯を炊く。当日の賽銭は、貯金しておく。

### (4) 横越巳待講

講中は七戸の農家。講には男だけで、女は入れない。また、忌中の人も参加できない。講は戊辰（つちのえたつ）の日の夜、宿に集まり、翌日の己巳（つちのとみ）の日を待つ。年六回の外、旧暦正月の最初の巳の日と四月初めの巳の日にも講を開く。

当日は普段着に袴だけ着け、夜八時頃宿に集まり、御本尊として巖島神社の掛図をかけ、お神酒・豆いりを供え、祭壇を作って拝みあげをする。「オンソラソバテイソワカ」と数回唱える。終えるとお供物をいただき、茶をのんで解散する。日露戦争前は酒一盃（二合五勺）を出しあい、豆腐汁があったが、日露戦争後の儉約令によって、お茶で済ますようになった。講中の用具として、南天の箸がある。

(5) 荒砥出来町八日講

講中一〇戸。以前は出来町一帯が講中で、他部落の人も参加していた。現在は旧十一月八日に開講するが、もとは毎月八日であった。当日は「湯殿山」と書かれた掛図を掛け、一同で「ザンゲザンゲロッコンショウジョウ」と唱えて拝みあげをやり、終わると精進料理で会食する。

この講は第二次大戦中一時中断したが、昭和二十五年から復活した。この講で建てた「湯殿山」碑が、金刀比羅さま（出来町）の境内にある。

(6) 十王関寺観音講

講中二〇戸、農閑期（十月～四月）の十七日に関寺円光寺に集まり、如意輪観音の掛図を掛け、お神酒・菓子など供え、置賜三十三観音の御詠歌を奉唱する。終わると各自持参の重箱を広げて雑談して、夜九時頃解散する。

(7) 荒砥新町地蔵講

講中八人。毎月二十四日に集まり、掛図を掛けて拝みあげをする。「オンカーカカミサンマエナムジゾウダイボサツ」と、立ったり坐ったり三十三回繰り返す。また、御詠歌二つを奉唱する。春の祭りには旗をたて、赤飯を供える。

ここの地蔵は三番坂の下にある。急勾配のS字型坂で、交通上の難所で、事故も多いが、不思議なことにケガ人が出ない。地蔵様が守ってくれるのだ、と信じられている。

(8) 浅立題目講

講中八戸、新暦の月の五日、隔月に集まって、「南無妙法蓮華経」と書かれている掛図を掛け、「ナムメヨウホウレンゲキョウ」とお題目を唱える。終えてから雑談して帰る。十二月五日には酒、赤飯が出る。

宿は講員の家を順番に廻るが、講員の宗旨が日蓮宗に限るということはなく、真言宗の人もいる。病気のときお題目を唱えると、よくなると言われている。

#### (9) 浅立山の神講

講中二二戸。以前は旧二月十七日に講をもっていたが、その後新暦三月十七日に変更した。しかし、出稼ぎが多くなったため、その時期に不在になる講員が多いので、現在は新暦四月十七日に開いている。講をもつ場所も、以前は山の神々社であったが、今は諏訪神社で行なっている。

当日は朝風呂に入って身を清め、十時頃まで集まり、拝みあげをする。拝みあげの時は「サンゲサンゲ ロツコンダイショウ ヤマノカミハサンジュウロクドウシンノイチニライハイ キメヨウチョウライ」と繰り返す。この唱言を繰返しているうちに、山の神になる人に神がのり移り、手が震えだし、ぴよん、ぴよんと躍り上るようになる。この人は手拭を四つ折にして目、耳を塞いでおるが、聞き役の人の質問に対し、講中のこと、その年の天候のこと、作柄のこと、堰用水のこと、その他部落のことなどについて、神の御託宣を下す。講中ではその御託宣を書いたものを部落中に配る。

#### (10) 西高玉門前稻荷講

現在の講中一三人。いずれもお婆さん方だけ。残っている帳面によれば、天保十三年（一八四二）正月大吉辰創開とあるが、当時の人数は不明である。明治二十五年頃は一九人おったようであるから、門前部落全戸が加入していたと考えられる。

講の日取りは、旧暦三月十九日、十月十九日の二回であるが、帳面を見ると、二・三・七・十・十一の各月に規約改正しているから、恐らく毎月十九日に開講していたものであろう。十一月十九日はお年越しである。

講当日は正一位稻荷大明神と書いた掛図をかけ、祭壇にはお神酒・いり豆・切餅を供え、拝みあげをする。「イナリダイミョウジン」と坐ったままで三十三回唱える。以前は立って唱え、坐って拝むという動作を繰り返した。唱え言のとき、一人が導師となり、他の講員はそれに従う。拝みあげのあと、御神酒をいただき、当番が準備したもので会食する。当番は三つの組の輪番となり、宿は当番組の中で都合をきいて決める。

当日の料理は、五〇円ずつ出し合う金額の範囲で、当番組が見積って作る。魚なども使う。明治二十五年から三十五年頃までは、「稻荷講開会の時は、神酒一人前半合宛之事、肴一ト鉢持参集合の事」と定められており、それが昭和七年には二升到、同十三年には一升とするよう決議されている。会食用の木杯、碗などは箱に入れて保管されている。当日の賽銭は貯金しておく。

稻荷講は荒砥地区、十王地区などにもあるが、十王地区の場合などは、屋敷神の祭りのような形でもたれている。

#### (11) 市神講

市神の碑は、荒砥・鮎貝・十王にあるが、市神講は他の講と比較して組織力は弱い。荒砥市神講の場合は、正月十三日に神主を招いてお祓いをしてもらい、周辺の家で祭りをする程度になった。十三日には、新しいシメナワを市神碑に張る。

#### (13) 古峯原講

この講は数的には最も多く、講員も部落全戸が義務的に加入している点で、他のものと質的に異なる。代参講で、火災の難を除くため、栃木県鹿沼市の古峯ヶ原にある古峯神社を信仰するもので、講中が一定の額（昭和四十年で、十王地区は三〇〇円）を出し合い、それで代表が参詣する。代表は大抵くじを引いてきめ、当った人は

参詣後講中分のお札を受け、戻ってから配る。お札を受けた講員はそれをいりり、かまどの周辺に貼って火難にあわないう祈念する。

その他、金華山講・子待講的なものがあるが、現在は旅行講的で、金華山講は金華山参り、子待講は米沢市小野川の甲子大黒天きのえねの祭りのため、講中を随時募集する形になっている。

## 2 屋敷神と屋内神

### 屋敷神

古い家では屋敷地内に色々な神を祭って、一家の安全と繁栄を願っている。それが屋敷神で、屋敷の東北または南西の鬼門、裏鬼門にまつる場合が多い。勿論それ以外にもある。では具体的にどのような形で祀られているのか、その様子を見てみよう。

#### (1) 屋敷神から部落鎮守への変化

入貝生（海生）には菅原姓を名のる旧家が多く、それぞれが異なる屋敷神を祭っている。

第2表のように、狭い地区に同一姓のものがあるから、この間には血縁関係をもつものもあるけれども、本家・分家がそれぞれの屋敷神をもち、別個に祭りを行っている。屋敷神として見れば当然なことであるが、これとは趣を異にするのもある。

横田尻東地区から、横田尻西地区の箱仏に通ずる旧道がある。現在は殆ど人の通

第2表 入貝生屋敷神

氏名	屋敷神
菅原久兵衛	八幡神社
菅原伝五郎	権現様
菅原栄一	羽黒神社
菅原助三郎	三吉神社
菅原三郎左エ門	庭渡神社 神明様



第3表 下山屋敷神

安部 龜吉	奥山 仙之助	奥山 秀一	安部 久吉	五十峯 浅次	安部 東兵衛	六軒 屋敷
地藏様	阿弥陀様	庭渡神社	山の神社	お水神様	熊野神社	屋敷神

らない道であるが、以前は主要道路であった。この道の側に、「虫歯稲荷」と呼ばれる小祠がある。横田尻の丸川家のうち、七戸が共同で祀っているものである。この稲荷の建っている区画が元田尻と呼ばれるのと合せ考えると、この稲荷は、その当時の丸川家の本家の屋敷神であったものを、次第に一族で祀るようになったものと考えられる。つまり、屋敷神が氏神へと変化したものであろう。

同じ横田尻東区の鎮守は、旧村社の皇太神社である。この皇太神社の別当職は、同地区我妻勇次郎家であった。これは皇太神社はもと我妻家で祀っていたもの、つまり我妻家の屋敷神であった。

東横田尻の虫歯稲荷は氏神的なものへ変化し、皇太神社は部落鎮守へと変化していった。荒砥地区入貝生の場合にはそうした変化を見せていないが、下山部落の場合は、その変化が前二者よりも分り易いので、その実態を眺めてみよう。

下山は、現在戸数七二戸の部落である。部落の起源については明らかではないが、古くは六軒だけで、その六軒を「六軒屋敷」と呼んできたといわれている。六軒屋敷とは第3表の通りで、それぞれが屋敷神を祀っていた。

現在の下山部落の屋敷神はこれだけではなく、稲荷・観音などを祀っている家もあるけれども、ここで特記したいことは、六軒屋敷の屋敷神のうち、安部東兵衛家の熊野神社が、現在では部落の北半分の四〇戸で、奥山秀一家の庭渡神社が、南半分の三〇戸で祭られている形に変化していることである。つまり、元来は一軒の屋敷神が、時代の経過とともに、部落鎮守的性格に変化しているのである。

(2) 屋敷神祭祀の動機

萩野地区には、延一四社の屋敷神が祀られている【『荒砥高校社会クラブ研究集録』より】。そのうち、七社が水神、四社が稻荷で、この二つが多い。水神が祀られている場所を見ると、井戸のそば、用水堰の脇などで、何れも毎日使う水との関連で、水不足や水からの病気などないようにと、水難に会わないようにとの願いが込められている。従って、水神が屋敷内に祀られるというのは、萩野に限らず、他の地区でも同じであろう。

水神を屋敷神として祀る家の中に、水車を利用して自家用製米をしたり、あるいは製米を業とした家もある。そうした家の場合は、信仰の度合いも深く、祭り方も念を入れているように思える。山口宇山際金子伊勢吉家は通称車屋で、水車による製米を業としていたが、秋九月十九日に祭りをするが、当日は杉の葉で小屋をつくり、その前に、「サラムスビ」と呼ばれるわらで編んだ容器に赤飯を盛って供え、家中でお参りする。また、正月には流しの柱に団子をゆわえ、お水神さまに供える。杉葉で小屋を建てるのは金子家だけでなく、山口・横田尻西地区にも見受けられた。

屋敷神として、水神に次いで多い稻荷の場合は、農耕神としての性格が強く作用しているようである。

鮎貝樋口景一家・石栗友次家、山口新地の犬飼家などの稻荷は、もと田の側にある畑の縁に立っていたといい、

後で屋敷地内に移したもので、いずれも開田が五〇〇刈、一、〇〇〇刈という目標に達したときに祭るようになったと言われている。千刈稻荷という呼称が生まれる所以である。

屋敷神としての稻荷の発生が、このように開田などの耕地の取得と結びついているとすれば、農村地帯である当地方に多いのは当然

第4表 南陽市 漆山屋敷神

屋敷神名	数
明神	12
屋敷明神	4
弁天神	9
水神	8
古岸	3
不動	3
虚空蔵	2
岩倉	2
天屋敷	2
不神	2
稲荷	2
その他	15
記入なし	17
計	88

(『宮内文化史資料』第二四集より)

のことであろう。ただ全町について悉皆調査をやっていないので、数的に把握できないのが残念であるが、参考のため、南陽市漆山地区における屋敷神調査の結果を掲げる（第4表）。

このうち、明神・屋敷明神・不明のものなどは、稲荷のようであると推定している。この推定に従えば、稲荷の占める割合は数の上で断然多いことになる。恐らくこの傾向は、農村地帯なら何処も同じであるに違いない。それだけ農村の人たちにとっては、土地は生活の安定を保証するものであった。

## 屋内神

以上、屋外の屋敷地内に祀っている神々の様子を、概括的に見て来たが、これから述べようとする屋内神は、殆ど毎日意識の中に入り込むものだけに、人々の生活に与える影響も大きいものがあつた。いふなれば、日常の民間信仰と言ふべきものである。その意味から、以下その実態を出来るだけ詳細に眺めてみよう。

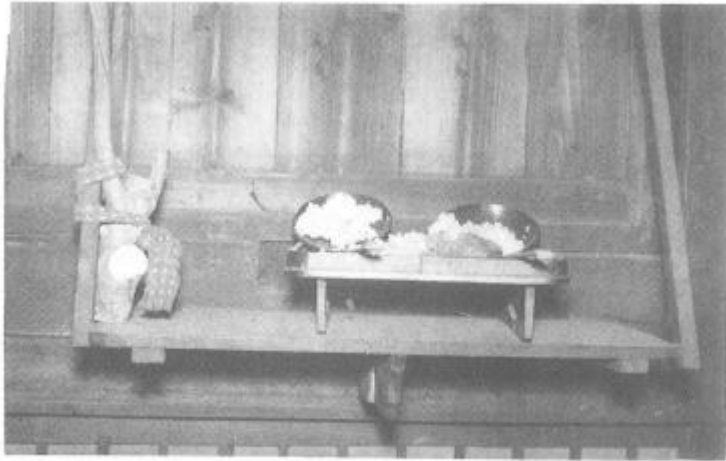
### (1) オエビスサマ

当地方の家庭で、恵比須・大黒を祀る神棚がない家はない。それほどこの二神は、民衆と深いつながりをもっている。神棚は、茶の間（勝手）か台所または膳部に祀られていて、中間・上段にはない。この神棚には恵比須・大黒の他に歳徳神、お田の神も祀っているが、これらを総称した形で「オエビスサマ」と呼んでいる。餅をついたとき、その他の物日に供物をするとき、「オエビスサマに供える」と言えば、それは恵比須神だけでなく、大黒も歳徳神も、すべて意識の中にある。常には「エビスサマ」は、神棚の神々の代表なのである。

エビスサマは、家族が一同揃って生活しているのを見るのが好きな神様だと言われている。茶の間に祀っているのは、以前、その家の茶の間住いであつたためだというし、台所・膳部にあるのは、やはりその家の日常生活の中心がそこであつたためだという。「千両分限（金持）」になるとエビスサマは台所に下る」などというのも、同

じ内容の伝承であろう。不幸があると、神棚・床の間には白紙を貼って塞ぐが、これについても、神棚の方は、家族の不幸を見せないためといい、床の間（皇太神宮の掛図をかけておく）の方は、不敬になるからと言われている。

このように、身近な神として親しまれているものだけに、人々は、この神に毎朝御飯を供え、手を合わせてから、一日の生活を始めるのを常とした。エビスサマに御飯を供えるのに、共通した様式があった。お膳に三本の杓子をのせ、杓子に御飯を供えるのであるが、毎朝御膳ごとおろし、ハガマ（飯釜）からへらで直接杓子に御飯



第15図：恵比須さまの御膳（貝生・菅原哲男家）

を盛り分ける。量は極く小量で、この御飯は一年間払うことなく、毎日盛り重ねておく。オエビスサマは減ることが嫌いな神だから、といわれている。一年間積った御飯は、年末の大掃除のとき下げ、洗って干飯にしてから、煎って食べたり、油であげて食べたりした。杓子に盛られた御飯はお膳ごと神棚に供えるが、盛り重なったものが崩れても、そのまま年末まで残しておく。三本の杓子のうち、一本は恵比須、一本は大黒、一本は歳徳神のものと区別している家もある。杓子は毎年ツメの市（年末の二十八日）に買ってきて、年取りの晩に古いのと交換した。

正月や物日などに、餅を搗いたり変り御飯を炊いたときは、真先にエビスサマに供えた。エビスサマの供物は、その家の相続人が食べることになっており、その他の人には食べさせない。若し、嫁入り前の娘が食べると縁遠くなると言われ、叔父に食べさせると財産を持つていかれるとも言われている。

神棚の司祭者が、相続人であったことの名残りではあるまいか。

当地方には何処の家にも、神棚・床の間・仏壇があり、毎朝御飯を供え、手を合せてから朝食をとるのが習しであったが、上段の間に祀る床の間より、勝手にある神棚を先に拝むように躰された。神棚、床の間、仏様の順になる。

一番先きに拝まれるエビスサマが、台所や膳部の戸棚の中に祀られている場合もある。古い農家に見られる例であるが、お札や像が祀られ、供物も供えられる。

エビスサマは、前述の通り、神棚に祀られる神々の総称として扱われるが、個々が区別されるときがある。旧暦十一月十五日の恵比須講、十二月九日のお大黒様の耳明け、大晦日の歳徳神、苗開き、大田植えの田の神である。恵比須講の十一月十五日は百姓の祝でもあり、この月は秋行月でもあることを考えると、農家の重要な折り目折り目には、個々に意識されるのであろうか。しかし、こうした民間信仰の中には、他のものと異質の伝承も含まれることもある。例えば、恵比須は川・海を司る神で、大黒は岡を司るとも言われている。恵比須が川・海の神なら、内陸部の当地方などでは、大黒を中心に祀ってもいいのであろうが、漁の神は生産神であり、それがそのまま受け入れられたものであろう。庄内地方では、海岸に打ち上げられた特異な形の木とか、海底から拾い上げた石をエビスサマとして神棚に祀る例があると聞くが、当地でも、男石を拾ったり、畑返し中に古銭を拾ったり、道路に落ちている馬の杵を拾ったりしたとき、神棚に供える習しがあった。稲穂が書かれている銅貨を、七枚供えると米不足しないなどの伝承と共に、何か重要な意味を内包しているように思える。

## (2) オタナサマ

オタナサマは置賜地方独特のものである。その分布は、旧上杉藩一円に拡がっているが、分布密度には濃淡が

ある。白鷹町一円、小国町一円は比較的少ない。飯豊町、川西町、米沢市三沢地区・南原地区などの山間部に多い。

白鷹町に現在残っているのは、浅立・山口・黒鴨・高玉などであるが、高岡には最近まで祀られており、十王・中山にも言い伝えから考えて、オタナサマと判断されるものがあつたから、以前はかなり広く分布していたのであろう。オタナサマはまだ十分に解明されたとは言えないので、ここでは代表的な内容のものを撰んで、その実態を述べる。

#### ① 浅立、菊地三郎家の場合

納戸の入口に祀っている。難産除け、盗人除けの神と伝えられており、年一回、旧十年十日（現在は新暦）をオタナサマのお年越といつて祭りをする。祭りには、シメ縄に生紙を短冊型に切つたものを下げ、餅をついて供え、家内中が「一年中おとがめ召さないで下さい」と念じながら拝む。

#### ② 浅立、沼沢甚市家の場合

昭和十年頃まで納戸の中に祀っていたが、その後は納戸の入口の鴨居の上に移している。祭りは旧十月十日（現在は新暦）で、菊地家同様シメ縄に紙を切つてはさみ、餅を搗いて供える。難産除け、盗人除けと言われており、オタナサマを祀っている家では、鶏を飼つてはいけなとか、肉類を囲炉裏で煮焼きするな等の伝承があつた。現在は、神主に祈禱してもらつて食べてもよいことになつた。十月十日には家から嫁、婿に行った人を招待する。



第16図：オタナサマ（沼沢甚市家）

### ③ 山口、寒河江恒次家の場合

寢床の真上の天井に祀っている。旧十一月十日が祭日で、この日シメ縄をつくって飾り、餅を搗いて供える。木地椀が二つあり、それに餅を入れ、盃の水と一緒に供える。この餅は跡取りが食べることになっていて、食べた後、盃の水で三度濡らす。キリミガキの意味であろうか。この日は精進で秋行振舞いをして、家から出た人を招待した。産神的性格と理解している。

### ④ 山口、金子伊勢吉家の場合

納戸のグシのところに、ノサをさげて祀る。祭日は旧十一月八日で、この日は、朝風呂に入って身を清め、カツアわら（打たないわら）でノサを作って下げる。餅を搗いて供え、家から出た人を呼んで御馳走する。オトカサマと同じだとも言う。金子家でも、安産の神と考えている。

### ⑤ 高玉、本木三右衛門家の場合

旧十二月十九日がお年越であったが、現在は新暦十二月十七日に、屋敷神の稲荷さまと一緒にお祭りをする。祭りの当日の夕方、お蔵の梁の上に祀ってあるのを下し、床の間に飾っておき、風呂に入ってから、衣裳を着せる。着せ方は、三寸乃至四寸四方の木綿布を御本体に縫いつけるだけで、男の手です。御本体は、二体が一對となって木箱に入っており、三〇センチメートル程の竹管の先端に生紙が巻かれており、その上に布をつけるようになっている。

祭りの供物は、お神酒・餅・お頭づきで、以前には、お盆二つを用い、一つには一七粒、もう一つには二三粒の餅を千切って供えた。現在は、両方の盆にお重ねを一組ずつにしている。木の椀に御飯も供える。供物の餅は、翌日雑煮にし、ご飯は粥にして食べる。当日使った食器は三度キリミガキをする。粥作りは女の人ができるが、そ

の他はすべて男手のみで、女は一切手をかけてはいけぬ。灯明をつけて拝むときは、一緒に拝んでもよい。

五例のオタナサマをみてきたが、細部の点では、どれも相違点が見られるが、類似点も見出せる。類似点をいくつかあげてみる。祀られている場所が、納戸の中、入口、天井といったように、納戸周辺であること。次に、オタナサマの性格であるが、難産除け、安産の神というのが多い。これは、納戸という場所との関連もあろう。十王地区では作神と言われていたようであるから、こうした伝承も加味して考えると、難産除け、安産の神は、作神と統合されて、生産の神となり得る。盗人除けという伝承も、生み出したものを守ろうとする意識の面では、十分に生産の心と結びついてくる。

祀る場所の他に、類似点としてあげられるのが、祭り当日に、その家から出た人を呼ぶことである。夫婦揃って寄り集まる秋行をこのとき行なうところを見ると、一族の祭りになっている。秋行は、親にその年収穫したものを持って行って礼をする日だという伝承もあるが、こうした行事が生きている人々のためにあるとは考えられないから、親というのは、恐らく祖先全体の代名詞と考えてよく、秋行は、先祖への収穫感謝の集いなのである。従ってオタナサマの祭りに秋行をすることは、オタナサマが先祖との関りをもつものであるとも言える。生産の神、先祖との関りなどを考えると、かつて農家の最重要部屋であった納戸周辺にこの紙を祀る気持が理解できる。

### (3) かまの神

餅を搗いた時、何よりも先にへらに餅を二つ千切って、かまの神に供える。供える場所は囲炉裏ではなく、「かまど」である。庶民の意識の中のかまの神は、古峯原さまのような防火の神ではなく、食事を通して家族全体を守ってくれる家の神である。だから、かまの神に供えた餅は、跡取りが食べるものとされ、跡取りが食べ残した



ものでないと、他の人は食えなかったのである。

かまどに火を焚くときは、手を水で洗い、かまどに塩を振って清めてから、火打石で「フクチ」（蒲の穂や柄の木の腐蝕したものなどを焼いてつくった）に火をつけ、けがれの無い火をおこした。そうしないと、「お不動さまの罰があたる」とさえ言われてきたのも、家の神として、家族全体を守ってくれるかまの神信仰が、火に対する信仰と一緒にしているのであろう。

#### (4) 便所の神

庄内地方に行くと、便所の中に棚を作って神を祀っている所がある。明らかに便所の神である。そうした例は当地方では見られないが、便所の神の存在を認めている証拠は、行事や伝承の中に残っている。

正月を迎えるに当り、どこの家でも方々に「とり餅」（小さなおかさね餅）を供えるが、供える場所の一つに便所がある。荒砥の街中では、とりもちを供えるとき、灯明をとす家があるが、便所には、輪切大根にマッチ棒を立てて燭台にする家がある。便所には松もゆわえ、この松は十五日夜のオサイト焼きのとき、別に小さなオサイトを作り、「センチンの神にオサイト焚いて進ぜ申す」（滝野）とか、「センチンの神も笑ってあげるヤハハエロ」（西高玉）などと囃して焼く。センチンは雪隠で、便所のことである。また、十五日のだんご下げには、便所にも下げる。貝生では、団子の数を月の数ときめている家もある。そして、便所にさした団子を食べると、ビンナイ（弱虫な性格）、百日咳、夏まけなどがなおるとも言われ、更に、便所をきれいにする嫁は、器量のよい子を生むとか、腰から下の病気にかからないなどの伝承もある。いずれも、便所の神の存在を認めているものと言つてよい。

では、便所の神の性格はどんなものであろうか。それを探る手掛りとして、言い伝えられていることを拾って

みよう〔第三節第3項で述べたものもある〕。

- ・ 便所には啖や唾を吐くとナメズ（白蘚）にかかる。
- ・ 便所には裸で行くな。
- ・ 便所には鉢巻、頬被りしたまま入るな。
- ・ センチンの神は頭髮がないので、頭髮を乱して入ると、髪が欲しいと引張られる。
- ・ 寒中に尻を出しても寒くないのは、便所の神が着物で蔽っていてくれるからだ。

これらの言い伝えが、いずれも、便所へふしだらな格好で入ったり、不潔なものを吐いたりすることを戒めているところを見ると、かなり厳しい神と考えられているようである。反面、着物で寒さを防いでくれるやさしさも持ち合せているようであるが、具体的に私たちと何処でつながる神なのであろうか。これについて貝生、荒砥などに次のような行事があった。

赤ん坊が生れて最初に使った産湯は便所に捨てるが、捨てた後、産湯を入れたハンゾの底を二つ叩けば二年後、三つ叩けば三年後に次子が生れる。生後七日目には、祖母か本家の伯母が赤ん坊を抱いて便所参りをし、子どもの髪を少し切って投げ入れてくる。荒砥では、父親が腰に刀をさして赤ん坊を抱いて行ったものと言われている。

これらの行事は明らかに、便所の神が産神、子育神的な性格を持っていることを物語っている。だからこそ、前述のような不敬を戒める伝承も受け継がれてきたのではあるまいか。